

東日本大震災と「三陸ジオパーク構想」への取り組み The measure for the Great East Japan Earthquake and the "Sanriku geopark concept"

橋本 智雄^{1*}, 伊藤 仁², 松本 潤², 伊藤 太久³
HASHIMOTO, tomoo^{1*}, ito hitoshi², matsumoto jyun², ito taku³

¹ いわて三陸ジオパーク推進協議会学術専門部会, ² いわて三陸ジオパーク推進協議会, ³ 中央開発株式会社

¹Iwate Sanriku geopark promotion conference scientific expert committee, ²Iwate Sanriku geopark promotion conference, ³Chuo Kaihatsu Corporation

岩手県沿岸地域では、古生代～中生代の貴重な地質や、三陸の海岸に代表される「リアス式海岸」や「隆起海岸」などの国内屈指の景観美やジオの多様性を主なテーマに、推進組織として「いわて三陸ジオパーク推進協議会」を平成23年2月に設立し、ジオパークに向けた取り組みを開始したところでした。

東日本震災により、予定していた協議会活動を休止しましたが、県内外の学識経験者を中心とする「学術専門部会」を設置し、震災を踏まえた新たなジオパーク構想と被災遺構の保存・活用に向けた検討を開始しました。

現在、当初検討を進めていたいわて三陸ジオパーク構想の計画を見直し、東日本大震災で発生した津波の「現象」と「復興」を主要なテーマとして取り入れることにし、継続的な復興のために、津波の記憶を後世に伝え、災害の記録・遺構の適切な保存と、正しい情報発信や環境整備を行う活動を進めています。

特に、津波による災害は、他の自然災害と比較して「後世に残る痕跡」が少ないのが特徴です。明治・昭和の三陸津波によって多くの犠牲がでたにも関わらず、その痕跡は遡上高さを示すプレートや教訓・被害状況を刻んだ記念碑程度しか残されませんでした。これは、自然の痕跡は残り難く、被災地が低地の宅地等であるため瓦礫は撤去され、被害の記憶を留める風景が失われてしまうことが一因と考えられます。また、災害発生当初は、悲しくも忌む記憶を早く消し去ってしまいたい気持ちから、被災遺構の保存について多くの人が消極的になりがちです。

被災遺構は、災害の実態をそのまま残すことになるため、後世へのメッセージとしてそれ自身が「語り部」となって多くの教訓を伝え続けていきます。将来の子供たちや津波災害を知らない人々の命を守り、これ以上の犠牲者を出さないためにも遺構の保存は重要と考えます。

国内でも、広島の前原爆ドームに始まり、雲仙普賢岳や有珠山の噴火災害、阪神・淡路大震災による被災遺構の保存など、各地で保存の取り組みが実現しています。

被災遺構として保存すべきものとして、「津波の破壊力や到達高さ・距離を示すもの」

「地震発生後からの避難などに関して重要なメッセージを伝えるもの」などがあり、破壊された防潮堤や構造物、車両などは前者、停電により使用出来なかった防災無線や人々を救おうとして奮闘中に被災した消防車両などは後者の代表的なものと言えるでしょう。被災した現物だからこそ伝えられるメッセージは、津波災害の実態を広く普及し、将来の減災と住民の安全を守るためにきわめて重要と考えます。

地震が多発し、常に津波の脅威と向かい合わなければならない三陸沿岸において、ジオパークの推進活動を通じて地震・津波の記憶を後世に残し、語り伝える努力を進めていきます。

現在、県外支援の拡大・観光振興の取り組みとして、学会会議等の積極的な誘致、大学・研究機関・自治体等を対象とした視察受入れ活動を開始し、ホームページを開設 (sanriku-fukkou.net) しました。

また、昨年11月に開催した震災復興シンポジウムをはじめ、被災地視察と三陸のジオを観察するモニターツアー、ガイド育成のための研究会、子供向けの学習イベントなど地域での活動も開始しています。

今後も、日本ジオパーク認定を目指し、更に活動の範囲を拡大していく予定です。

キーワード: ジオパーク, 津波災害, 岩手県

Keywords: geopark, Tsunami hazard, Iwate Prefecture